

2017/08/06

「信仰に生きる」

■ 信仰は何に根差しているか

「イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」(マタイ 16:15-17)

ペテロの告白は、イエスをキリストだと告白した第一号であり、ある意味、教会はここからスタートしています。この時イエス様は、この告白は、人間の知識や知恵によるものではなく、神が示し、あなたを支えていることによるものだと言われました。

私達がイエス・キリストを信じる土台は、イエス様がよみがえったという歴史的事実にあるわけでも、聖書の教えにあるわけでもありません。それは、知恵や知識によるものではなく、神の力に他ならないのです。そのため、どんなに聖書やイエスが批判されようとも、信仰は動じることがありません。20世紀初頭に、様々な哲学や思想、科学が神を否定し、神を信じる時代は終わったと宣言しましたが、実際のところ、20世紀にクリスチャン人口は爆発的に増えました。それは、私達の信仰が人間的なものに頼っているのではなく、神の恵みによって支えられているからです。

■ 信仰を使って生きる＝祈り求めよ

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「信仰による義人は生きる。」と書いてあるとおりです。」(ローマ 1:17)
(別訳)

ここでの「信仰」は、「神の信実」すなわち「十字架の贖い」のことです。わかりやすいことばを使うなら、「神の恵み」と表すことができるでしょう。つまり、「その義は、神の恵みに始まり恵みを進ませる」——神の恵みによって信仰を手にし、神の恵みによって信仰に進むことができるのだから、信仰を使って生きようと勧められているのです。

信仰は神様からいただいたプレゼントです。その信仰を、私達は十分に用いて生きているでしょうか。信仰とは、神と交わりができるということであり、それによって、私達に素晴らしい宝、限りない平安がもたらされます。たとえるなら、神様との直通電話機のようなものですが、それを私達は一日に何回使っているでしょうか。食事の時に10秒くらい使うだけで、せっかくだいた電話機を1日中放りっぱなしにしているのではもったいないことです。

イエス様はなんとしても私達に信仰を使ってもらいたいと願い、次のように語っておられ

ます。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」(ヨハネ 15:7)

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」(ヨハネ 16:23)

■ 本当に求めているものとは

イエス様が、どんなことでも構わないから祈り求めるようにと教えておられるのは、祈ることで、神様と交わる習慣を身に着けることができるからです。そして、祈りの内容にかかわらず、神様は必ず助けてくださいます。神様は、この経験を私達にさせたいのです。ところが、神に祈り求めることを繰り返すうちに、祈っても聞かれないという現実にもぶつかるようになります。この時、なぜ聞かれないのかと、立ち止まってみる経験が、さらに私達の信仰を成長させます。「途中であきらめていた?」「御心に反していた?」「時ではなかった?」等、自分の信仰や神様に思いを巡らすことで、祈りが聞かれないように思える時でも、神様は祈りに対して答えてくださっていることを悟ることができるようになります。その時は、わからなくても、後になって、願いがかなわなかったことによって、さらに良い道に導かれていたことを知り、祈りは聞かれていたと気づくのです。

このように、いろいろなことを祈れば祈るほど、祈りというものがどういうものかわかってきます。そして、神様との交わりが深くなればなるほど、自分が求めるものの意味を考えるようになり、同時に自分の不信仰にも気づくようになります。祈ってもあきらめてしまう自分、疑ってしまう自分に気づき、御言葉を求め、御言葉に慣れ親しむほどに、さらに自分の罪深さにも気づくようになります。人との交わりを通して、愛せない自分に気づくこともできます。結局、どんなことでも神に祈り求めよというイエス様の教えに従った結果、私達は、自分の弱さ、罪深さに気づき、こんな自分が愛されるはずがないという葛藤に陥り、その結果、自分がいちばん求めているのは、こんな自分を愛してほしいということだと気づくのです。こうして、私達は十字架の愛を知るように導かれます。最終的に、神が与えた信仰は、私達を十字架に導くのです。

■ 十字架の愛を知る

イエス・キリストは十字架に架かることによって、「私はあなたをダメだとは思わない、私はあなたを受け入れ、あなたを愛してやまない」と、私達に語りかけています。ところが、私達はその十字架を、なかなか素直に受け入れることができません。弱い自分、罪深い自分

を知らば知るほど、こんな自分が無条件で愛されるということに納得することができないのです。

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。」
(ローマ 8:33-34)

神はあなたを正しい人間として受け入れているのに、その神の愛を邪魔しているのは、ほかでもない自分自身だと聖書は教えています。人は、神を求めて、神に近づけば近づくほど、つまり、信仰を使えば使うほど、自分の醜さ・汚さに気づきます。しかし、そんなあなたを私は受け入れる、誰かがあなたを退けることなど絶対にあってはならないと、神様は強く語られます。こんな自分が愛されるはずがないという思いと、愛されたいという思いとの間で葛藤し、そのつらさが限界に達し、「神様助けて下さい、この罪人をあわれんでください」と叫ぶ時、この祈りを神様は義とするのです。

こうしては、人は、神が私を愛しているという愛を受け入れることができ、初めて平安を手にすることができます。これこそ、私達が本当に求めているものであり、神が与えてくださった信仰のゴールです。自分が罪人であることを知り、それでもなお神は私を愛しておられることを受け入れ、神に愛されている自分を受け入れることによって、私達は本物の生きる勇気を手にする事ができるのです。

■ 神が罪人を義としてくださる理由

1. 罪は病気だから

罪は、神の愛を知らなかったゆえに生じたものです。ですから、神様は罪を病気として受け入れられます。病人に医者が必要なように、罪人には私が必要だから、私はこの世に来たと、イエス様は言っておられます。

2. その病気をいやす自信があるから

罪という病気は、自分に愛される価値が見えない不安から生じます。神様は、無条件で私達を愛することによって、必ずそれをいやすことができるという自信を持っておられます。重荷を持って私のもとに来るなら、その重荷を下ろさせ休ませてあげると約束されています。

3. いやされた姿を知っているから

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(Ⅱコリント 3:18)

神様の目に私達は、泥で汚れたダイヤモンドのような存在です。どんなに表面が汚くて

も、神様は私達のいやされた姿をごぞんじなので、私達を覆っている汚れを取り除き、私達の本来の姿を取り戻すことがおできになります。その姿とは、キリストに似た姿です。これこそ、イエス様がなさりたいことなのです。

■ 信仰は、あなたをまことの平安に導く

イエス様が、十字架に架かる前、弟子の足を洗ったのは、十字架の意味を説明するためです。神様は私達を造られた方ですから、本来の私達の姿をご存じです。そこにどんなに汚れがついていても、それを取り除き、元の姿に戻すことができます。「救い」とは、「いやす・健康を取り戻す」という意味の言葉です。イエス・キリストは、無条件で私達を引き受け、十字架によって、罪という私達の病をいやして汚れを取り除き、本来の健康な姿を取り戻させてくださるのです。

私達が自分をダメな者だと思ってしまうのは、自分の表面だけを見て、本来の自分の姿を知らないからです。そのために、自分を愛することができずに、神に愛されていることを受け入れられないのですが、罪は病気であることを認めるなら、病人の自分をいたわり、自分の罪を言い表し、治療してくださる神様におまかせする選択ができます。これが、自分を愛するということです。

神が与えた信仰は、この十字架の愛を知ることに使われます。信仰を使って神に近づくと、汚れて醜い自分を知ることになりますが、さらに、その自分を無条件で受け入れてくださり、本来のキリストに似たものとして造られた姿に戻してくださる神の愛を知ります。私達がなすべきことは、何も心配せず、十字架の愛を受け入れて認めることです。それが、自分を受け入れ愛して生きることを可能にします。このようにして、信仰は神の愛を受容させ、まことの平安をもたらすのです。